

平和祈念文集



▲佐々木禎子さんの遺族から寄贈を受けた「禎子鶴」
(アビスタ1階に常設展示)

広島派遣を終えた後、派遣中学生は感想文を作成しました。
派遣を通して感じたことや平和への思いが、派遣中学生それぞれの言葉で綴られています。

我孫子中学校 2年 山元 誠人

昭和 20 (1945) 年 8 月 6 日、広島に人類初の原子爆弾が投下されました。通勤、通学をしていた人、工場にいた人、家にいた人、外にいた人、さまざまな人がいました。その中で、この原爆がそれらの人たちの命をうばっていったのです。原爆は、爆心地から 500m の場所でも 2000℃の熱さになるのです。2 km 離れた場所でも地面が 100℃の熱さになります。だれもあまり 100℃のものを触った人はいないでしょう。触ったとしてもすぐに手を離したくなる。そんな温度です。それを外にいた人たちはまともに受けたのです。全身がやけどになり、私たちでははかりきれないほどの熱さを感じていたでしょう。木の自然発火の温度はどのくらいか知っていますか。約 460℃です。460℃に達すると、木は勝手に火を発してしまいます。当時の家や学校などの建築物は基本的に木造でした。爆心地近くでは、500m で 2000℃ですから、木造の建築物は、どんどん燃え全焼しました。建築物が全焼したのは、爆心地から約 2 km のところまでです。遠いところでは約 3 km のところまで家が全焼しました。



原爆の被害は 8 月 6 日だけではありませんでした。爆発直後、放射線で亡くなった方、その後の炎に焼かれて亡くなった方、建物がくずれその下敷きになった方など、大変むごい亡くなり方をした人がいます。その後、1 日、2 日、1 週間、1 カ月、1 年、何十年と今も原爆病で苦しんでいる人もいます。原爆は確かに 75 年前に投下されました。その事実は変わりません。ですが、今も苦しんでいる人がいる、原爆の被害は今もなお続いているのだ、ということを知りました。

私がとても印象に残ったことは、平和記念資料館の中にあつた遺品や、被爆した物などの当時のものです。お弁当箱は黒くなり、中のご飯も真っ黒でとても食べられるような感じではありません。ふたはしてあつたと思います。ですが、なにか袋に入っていると、ふたがしてあろうと、人がおいかがさつていても、少なからず被爆の影響を受けています。お腹の中にいた赤ちゃんも同じです。お母さんの中で被爆し、生まれてからすぐに被爆の影響を受け始めます。物心ついたころからなにかしらの障害をもち生まれることが多いそうです。

資料館には、お弁当箱の他にも、日記や水筒、神社の仏像、瓦礫などがありました。水筒やビン、形がくずれ、飲めるような状態ではなくなり、仏像、瓦礫なども溶けてドロドロになり、固まっておかしい形になったり、欠けていたりしていました。また、服はボロボロになっていて、赤い血らしきものが付いていたり、着られる状態ではなくなっていました。これらの被害は原子爆弾という 1 つ、たった 1 つの爆弾で起こつたのです。形の整つていた服、ビン、瓦礫がくずれてしまつたのです。私は、形の変な瓦礫を見るのは初めてでした。普段は

きっちり四角のものしか見ていなかったのでも驚きました。「瓦礫ってこんな形になってしまふのか」と。

戦争は怖いもので見てはいけない、とずっと思っていました。なので、「広島に行くか、派遣に行ってくれるか？」と聞かれた時、身ぶるいをしてしまったのです。母からも「派遣に行くならきちんと覚悟をした方がいい。とてもむごいから。」とずっと言われていました。その中で私は「戦争や原爆について無知な私なのだから、少し学んできた方がいい。」と決断し、行きました。実際は、私が思っていた 100 倍くらいの経験でした。その中には、見たくないものがたくさんありましたが、戦争や原爆はどれほど恐いのかがよく分かりました。そして、絶対にこれからあやまちを繰り返してはならない、というのも分かりました。私達には、戦争のような時期はまだありません。でもそれは、「まだ」だと思いました。原爆の恐ろしさを知っている人がいるから「まだ」なのだと思います。もし、これから戦争や原爆のことを後世にうまく伝えられなかったとしたら、また 75 年前の悲劇が起こってしまう。そのようなことをさせないためにも、これからある、リレー講座や平和の集い、また、大人になってから自分達で子どもや同世代に戦争、原爆の恐ろしさ、悲惨さを伝えるのと同時にあやまちを 2 度と繰り返してはならないというのを伝えていこうと思います。

私がこの広島派遣に参加して、いろいろな人達の思いを聞くことができました。

「逃げずに母らと一緒に死ねばよかった。」

平和公園では、

「ここでわいわいピースをしている人もいるけど、本来そういう場所ではない。」

などの思いを聞きました。こういう思いも乗せて話をすると何も知らない人たちも少しずつ分かってくるのではないかと思います。

我孫子中学校 2年 高瀬 由華

私が広島派遣に行かせてもらって1番に思ったことは、今まで「平和大事、尊い」と言ってきた裏には何もなく、上辺だけだったということです。

私は広島住民だったので、資料館に行ったこともあり、学校で平和について学んだこともたくさんありました。ですが中学生になった今、もう一度足を運ぶ機会ができて様々な悲惨なものから目を背けてきていたことが分かりました。



被爆された方たちの消え去った命、お互いの文化を認め合わなかった政治方法、未だに強化され続けている核兵器など・・・。

原爆・戦争は怖い、平和は尊い、過ちを繰り返してはいけないという基本だけを受け継ぐのではなく、その背景をしっかりと読み解き、伝え続けていく必要があると思いました。

派遣で学んだことをしっかりと振り返って、次へ繋げる準備をしようと思います。

1945年8月6日、午前8時15分にアメリカ軍が広島に向けて原子爆弾を投下。この一発の兵器がピカッと光った瞬間から原爆病なども含め、今までに約14万人の方が亡くなられたと言われています。原爆の爆風によって崩れた建物の下敷きになって、そのまま焼き殺された方、割れたガラスが体の奥底まで突き刺さった方、放射線によって後の原爆病で亡くなられた方など、大勢の方達が原爆によりひどい殺され方をされたそうです。

平和記念資料館を実際に見学し、様々な資料を見ました。たくさんの写真、絵、遺品を見ていく中ですごく胸が苦しかったし、なぜ戦争が起き、原爆が作られてしまったのかと強く思いました。

いつも通り朝が来て、通学して通勤して。広島の方達は一瞬にして広島町の町が殺戮の場になるとは思っていなかったと思います。私達と同じ、中学生の子ども達もたくさんいたと思います。今後のこと、戦後のことを想像し、夢や希望をふくらませていた子ども達もきつといたことでしょう。

資料館で見た被爆された方達の遺品と思いのコーナーがとても印象に残っています。すごく小さい子から大人の方まで様々な年齢の方達が被爆して亡くなられていることが分かりました。それぞれの思いが交差してできているものが平和記念資料館なんだなと思いました。様々な資料や説明文を読んでいく中で、見たくないと思うものも数多くありました。胸がキュッと締めつけられる感覚があって、実際にこのすごくおぞましい光景を目の前にした方達は、どれだけ辛かっただろうと考えさせられました。

平和記念公園も歩くことができ、実際に原爆が投下された地面の上を歩いているんだと思うと悲しいような怒りのような気持ちになりました。今でも土を掘るとたくさんの骨や遺品が出てくること、そしてガイドさんの

「みなさんここに来た時はココニコピースやらして帰られるんだけど、本当はそんな事する場所じゃないのよ。」

という言葉聞いて、この出来事は必ず伝え続けていかないといけないなと強く思いました。

実際に被爆を体験され、目の前で投下の様子を見た方からお話を聞くことができました。話の中の、

「母の体には材木がのしかかる。1歳の弟を抱きながら……。生きながらではなく死んでから焼かれていったのがせめてもの救い。」

「逃げずに一緒に死ねば良かった。」

という言葉が頭から離れません。実際に体験された方の言葉は、学校の先生や大人達からの言葉とは比べられない程ずっしりと重く、言葉が発せられる度に頭の中に鮮明に光景が流れてくる様でした。話して下さった方はすごく辛く、思い出したくないという気持ちもあつたろうと思います。その方達の思い出す回数を少しでも減らしていけるように、私達がしっかりと伝え続けたいとといけないなと思います。

今回、実際に広島へ行くことができ、私達自身が見て来たものをそのまま伝えることが大切なのではないかと思います。怖いと思った資料、被爆を体験された方の言葉、我孫子の宮田さんのことなど……。

リレー講座では、資料に触れてもらう機会を増やし、年齢に合った分かりやすい文章で伝えることを課題として、今回一緒に行ったメンバーと頑張っていけたらいいなと思います。

戦後生まれてきた私達は、生活の中で爆弾が投下されるから怯えるなんて考えたことはないと思います。だから、もっと戦争を身近に感じてしっかりと過去を読み解くきっかけに私達がなれるよう、努力していきたいです。派遣団として今回参加した意味を考えて、今後の取り組みにも参加していきたいなと思いました。

湖北中学校 2年 染谷 美翔

「戦争と平和について考える」

今回、ご縁がありこの広島派遣という大変貴重な体験をさせていただけたことに感謝しています。派遣学習を通して、戦争や平和について新たな一面を見だし、より深く考えることができました。以前にも戦争や原爆について学ぶ機会があり、表面的な知識は頭に入れていました。しかし、派遣を通し、当時の資料や調べても分からない詳細に目を向けることで、戦争や原爆が、私自身の感情を伴ったより具体的な知識になりました。



広島に降り立つと、「この土地は時代が違うだけで、原爆が落とされた場所なのだ。」と実感すると同時に、恐ろしくもなりました。そんな気持ちを強く感じさせられた理由はやはり、原爆ドームを目にしたからでしょう。改めて負の遺跡は残すべきだと思いました。負の遺産がある限り、人々の心から戦争が消えてしまうことはないでしょう。

被爆者の方のお話を聞いて私達が受け取るものは、「一人の人間の視点に立って見た原爆」だと考えました。どこで何があって、何人が亡くなったという表面的なものではありません。被爆者の方の体験は、残りの家族を探して防火水槽に頭を突っ込んで炎の中を進んだり、知人の遺体を発見してしまったりと、詳細が分かるがゆえに、とても残酷なものでした。しかし、戦争を知るうえで、被爆者からのお話を伺う以上に良い方法はないでしょう。家族を奪った戦争の記憶を思い出して一番つらいのは、戦争を体験した人です。だからこそ、私達は被爆者である國分良徳さんから伺ったお話や思いをしっかりと伝えていかなければならないと思いました。

広島平和記念資料館を訪れると、当時の資料が数多く展示されていました。遺品とそのエピソードに注目すると、たくさんの未来が奪われてしまったことが分かります。被爆後の写真や絵に注目すると、被害の大きさが伺えます。どの資料も私にとって、とても衝撃的でした。そして、深く心に残りました。それは、どんな人にでも共通する感覚だと思います。遺品の展示の一つに学生証がありました。解説を読むと、学生証の所有者である15歳の少年が被爆後、片方を倒壊した建物に挟まれ動けなくなったそうです。警察官がやってきて、助け出そうとするも出られませんでした。警察官が、「助けられない。許してくれ。」という少年は、「ありがとうございました。これを宮島の家の方に渡してください。」と言い、その学生証を警察官に託したそうです。この解説を読んだとき、何とも言えない気持ちになりました。自分の死を覚悟し、意識はしっかりしていながら、生きることを諦めなければならなくなった。その少年は、どんな気持ちで学生証を託したのか、考えると胸が苦しくなります。

私たちがこうして原爆について学んでいる理由は、『同じ過ちを繰り返さないため』と、2日目の反省会で発表しました。そこで、我孫子市長から、『過ち』とは何かを問われました。それについて考えるために、原爆が落とされてしまった背景に注目してみました。

原爆が投下されたのは、1939年から始まった第2次世界大戦中のことです。日本は、ドイツ、イタリアと三国同盟を結んでおり、共に戦う仲間ということになります。当初の戦局は日本有利であったものの、1942年の6月に起きたミッドウェー海戦で敗れてからは、日本軍は各地で敗退していき、日本はどんどん窮地に追い込まれ、敗戦確実とまで言われていました。それにも関わらず、国民には勝ち続けていると出まかせを伝え続けていたそうです。日本は死者が増え、勝ち目が見えないにも関わらず、特攻隊などとあってはならない最終手段を使い、あがいていました。その頃から原爆の発案が行われ、アメリカ側の主張としては、死者をこれ以上増やさないため、戦争に終止符を打つためとして原爆を投下したとありました。

私が調べたことと私の考えを記したいと思います。なんてひどい話だと思いました。私の考えはまとまりました。『過ち』とは、戦争を行ったことだと思います。戦争が起こってしまった原因には、人種問題や経済に関する事などがありますが、なぜそれを武力で解決しようとしたのかが理解できません。どこかが戦争をしかけて、守るため、という理由もあるかもしれませんが、とても難しい問題だと思います。ですが、現在はこの頃よりも戦争が減りつつあります。それは、国際連合などが誕生し、世界や国同士で協力していく姿勢ができてきたからだと思います。しかし、互いに利益があるから成り立っている、不利益が自国に生じたら相手を攻撃するという関係ではいけないと思います。国は1つ1つの個々ではなく、地球の中の区分けに過ぎず、1つの大きな組織の仲間である。全員がそのように考え、平和な世界になって欲しいと願っています。

布佐中学校 2年 藤川 幹太

私は8月10日から12日まで、我孫子市の広島派遣団に布佐中学校の代表の立場で参加をしました。

私が今回この派遣に応募した理由は、自分の目で確かめることによって、平和の尊さや戦争の恐ろしさを学びたかったからです。そして、被爆された方々のお話を伺い、これから未来を生きていく若者の1人として、戦争のない国を創っていく1人になりたかったからです。実際に3日間で貴重な体験をすることができました。



まず初日に原爆ドームを見学したとき、今にも崩れ落ちそうな屋根や建物を目の当たりにしました。この建物は、日本だけではなく世界中でも有名なもので、私自身も社会の教科書や資料集、テレビなどで何度も見たことがあります。しかし、我孫子市は幸いにも原爆の被害を受けた市ではないので、私が生活している中で、このような建物は身の周りにはありませんでした。爆風や熱風で破壊されたこの建物からは、原爆の威力を想像させられました。また、それだけでなく、無言で立ち尽くす原爆ドームは、平和の尊さや戦争の恐ろしさを私たちに訴えているように感じました。

次に、被爆体験者である國分さんのお話を聞く機会をいただきました。國分さんは9人家族のうち、お母様を含めて4人の家族を亡くされました。私にも大事な家族がいますが、幸いにも原爆はもちろんのこと、病気で亡くなった人はまだ誰もいません。しかし、私がもし國分さんのように原爆で家族を亡くしたら、被爆体験者として語り部を務めることができるでしょうか。國分さんは、家族を失ったこと、街が焼け野原になったこと、生きるために仕事や生活で大変なご苦労をされたことなどを語ってくださいました。お話を伺いながら、始めは思い出だけでも辛く、これらについて他人に何度も話すことなど、私には到底できそうもないと思っていました。しかし、途中から國分さんはそれでもなぜ語ってくださるのだろうかと考えながら、耳を傾けていました。私は、辛い過去だけれど、伝えられるのは誰にでもできるものではなく、また私たちが生きるこれからの日本で、再び原爆や戦争の被害を出してはならないという強い思いがあって、語ってくださっているのではないかと思いました。テレビやインターネットでも戦争や原爆の悲惨さを訴えているものがあります。私も社会の授業を中心に学習したことがありますが、実際に被爆された方のお話を伺うのは初めてでした。お話を伺うまでは、戦争はいけないうことだと感じてはいても、何となく他人事でした。しかし、家族や暮らしている街を失う話を直接伺うことで、自分に置き換えて話を聞くようになり、「遠い街の知らない人」の話ではなく、「自分にも大いに関係ある」話だと実感するようになりました。

そしてその気持ちは、平和記念資料館に見学に行ったときに、さらに強いものになりました。資料館には、原爆が投下された8時15分で止まっている時計を始め、一瞬で原爆の被害に遭った広島街や人々の様子が分かるものが数多く展示されていました。皮膚がただれ、ガラスが全身に突き刺さり、まるで幽霊のように手を前に突き出して、水を求めてさまよう人々の絵が飾られているなど、恐怖で目を覆いたくなる場面もたくさんありました。佐々木禎子さんという、将来は体育の先生になりたかった希望を持つ少女の命も原爆の後遺症である亜急性リンパ性白血病で奪ってしまいました。彼女が生きたいという強い願いを持ち、折り鶴を折り続けたという話をこの資料館で改めて聞いたとき、胸が張り裂けそうな思いがしました。

被爆体験者の國分さんや資料館、爆心地に近い本川小学校等で多くのものを見学したり、学んだりする中で、私が最も考えたのは、原爆を投下した理由についてです。当時の日本は、アジアの利権をめぐるアメリカと対立し、戦争に発展したとされています。その後、争いが長期化したこともあり、広島と長崎に原爆が投下されてしまいました。このような非人道的な兵器で当時、一般の人々が苦しまないといけないなんて、自分は許せないと思いました。原爆を投下した理由を改めて理解できた資料館見学でしたが、原爆で戦争を終わらせようとしたことについては、私は今でも間違っていると思います。そして、その間違いは、私たち未来を受け継ぐ者が自分のこととして考え、行動していかなければ、75年前の惨劇と同じように、これからの日本や世界で起きるかもしれません。そうならないためにも、私は広島派遣団の一員として、まずリレー講座で我孫子市の小学生を中心に今回学んだことや体験したことを伝えていきます。そして、1人でも多くの人たちに平和の大切さを訴え、これからの日本や世界のことについて、真剣に考えていきたいです。3日間お世話になった全てのみなさん、本当にありがとうございました。

布佐中学校 2年 寶 春香

「2度と同じ過ちを繰り返してはいけない。」

これは、私がこの3日間を通して最も感じた言葉です。

広島派遣の初日、1番始めに原爆ドームを見学しました。初めて実際に見た原爆ドームは強大で、その存在自体が平和に対して無言の中でも切実に訴えているようでした。次に、平和記念公園の見学を、ボランティアガイドさんと一緒に行いました。資料館の辺りは当時、約4,200人が住んでいましたが、その場で亡くなった人も含め、周辺では約7,200人もの人が「ピカッ」と目の焼けるような光と「ドーン」と耳の碎ける爆発的な音と共に亡くなりました。私は、1秒1秒が怖くなりました。また、爆心地から500メートル先の温度は、約2,000度に至り、人間の水分が蒸発し、皮膚が剥がれてしまうということをお聞きしました。皮膚が剥がれ骨だけだなんて、想像するだけでもぞっとします。当時の人々が、どれほどの痛みや苦しみを抱えながら生きていたのか、改めて知ることができました。



その後、16歳の時に被爆した國分良徳さんの体験談を拝聴しました。國分さんは当時、爆心地から4.8キロメートルのところで被爆なさいました。私は、こんなに距離が離れていても被害を受けることを知り、原爆の威力を再度感じました。國分さんは、9人家族のうち、お母様と1人の妹さん、そして2人の弟さんの合計4人を亡くされました。私は國分さんが「母が生きながら焼かれるのではなく、死んでから焼かれたのがせめてもの救いだ。」とおっしゃったことが、胸に深く突き刺さりました。私も、次々に迫ってくる火の海を目の前にして、多くの人々が苦しみながら死んでいった様子を想像するだけでも恐ろしいからです。また、ぼつり、ぼつりと言葉少なげに語ってくださる國分さんの姿から、本当は思い出したくないのに、今、私たち未来を生きる若者に伝えなければ、原爆の恐ろしさがこれからの世代に届かないという使命感で語ってくださっていることを痛感しました。そして、私が広島を訪れた理由を改めて確認することができたと共に、感謝の気持ちで一杯になりました。

2日目。まず初めに原爆の子の像に行き、千羽鶴を奉納しました。そこには、全国、また世界各国からの折り鶴もあり、世界中の誰もが平和を祈っていることがわかり、心が温まりました。しかし同時に、それでも核兵器保有国があるということは、平和な世界と核兵器が共存できている人が少なくないのではないかという疑問を拭えませんでした。

続いて、平和記念資料館を訪れました。資料を見学していくうちに、足が前に進まなくなるほどの恐怖を味わいました。私が1番印象的だったことは、原爆の投下についてです。派遣前、広島をこのような悲惨な状態にした原爆は、残酷だなと思っていました。しかし、一向に降伏の兆しを見せない日本に対して、アメリカは大きな被害を与えるために、原爆を落としたことを知り、日本を含めた当時の世の中に対して、残念な気持ちで一杯

になりました。投下した目的について理解はできましたが、結果として多くの尊い命を奪うことになり、納得はできませんでした。資料館の見学の後、爆心地から 400m しか離れていなかった本川小学校に行きました。焼け焦げた配電盤や溶けたパイプ等を前に、言葉では言い表せない感情で心が埋め尽くされました。

こうして迎えた広島派遣最終日の 3 日目。気持ちを入れ替え、もう一度資料館を訪れました。この日は、平和とは何なのかを自分なりに見つけ出すため、国民の生活を中心に見学しました。8 月 6 日の建物疎開の作業日、ある 1 人の少年は持っていったお弁当を食べることなく、原爆によって亡くなりました。彼は、死とは無縁の未来を描いていたことでしょう。しかし、原爆は彼「たった 1 人」ではなく、「1 人もの」尊き命を奪ってしまったのです。この時私は、生死の重さについてよく理解していく必要があると感じました。

この 3 日間を通して、言葉だけではない戦争の恐ろしさや悲惨さ、平和の尊さを身をもって実感することができました。私は、戦争とは 75 年前に一区切りついた、遠い過去のものだと思っていました。しかし、本当は私たちが正しい考えを持ち、それを行動に移していかなければ「平和」「戦争」のどちらにも簡単に転がってしまうということに気がつきました。私の考える「過ち」とは、武力で物事を解決させることです。だからこそ、核兵器がある限り世界中の人々が笑顔でいられる何不自由のない、理想とする「平和」な世の中は訪れないのです。誰もが「二度と同じ過ちを繰り返してはいけない。」と根拠を持って言えるよう、私は、知る努力、伝える勇気を持ち、より多くの方々に戦争の恐ろしさ、平和の尊さをこれから伝えていきます。

3 日間ありがとうございました。

湖北台中学校 2年 中村 恭平

8月6日、広島では、いったい何が起きていたのか。3日間で沢山のことを学ぶことができました。

1945年8月6日8時15分、広島に原爆が投下されました。一瞬にして何十万人もの人々の命、当たり前の日常が奪われました。

広島に着き、思いました。本当にここに原爆が落とされたのだろうか。疑いをもつほど賑わっているとてもすばらしい街でした。今でもここが焼け野原だったなんて想像もつきません。



そして原爆ドームが見えてきました。そこでは、被爆前の原爆ドーム、産業奨励館と被爆後の写真を見比べました。その建物の柱が曲がっていました。それは、爆風で曲がったそうです。原爆は強烈で恐ろしいと強く感じました。

その後、平和記念公園を見学しました。そこには、慰霊碑や噴水などが多くありました。被爆された方々への思い等、広島の方々の様々な思いがたくさんつまっているものだと思いました。

また、「75年は草木も生えぬ」と言われた広島が、今は緑豊かな綺麗ですばらしい街になっています。それは、広島の方々の努力があったからだと思いました。

次に、平和記念資料館に行きました。自分の知っていた原爆と広島とは全く違うものでした。ボロボロになった衣服、誰か分からないほど焼け焦げた人々、ほとんど何も残っていない広島、建物の下敷きになり身動きの取れない人々、見れば見るほど辛く、苦しくなりました。

「水をください。水をください。助けてください。」

と必死に助けを求めている人々。本当に声が聞こえてきそうなほど辛さが伝わってきました。また、「助けを求められても、どうすることもできませんでした。」この言葉を聞き、とても複雑な気持ちになりました。助けたくても助けられない。助けることができない。とても悲しく辛いことだと思いました。

父と母を亡くし、行き場を失い、路上で生活する子どもたち。皆さんは自分一人で生活することができますか？僕はできる自信がありません。そんな中、前を向いて必死に生きようとしている当時の人は、とてもかっこいいと思いました。

広島には、世界各地からたくさんの千羽鶴が奉納されていました。年間約10トン以上の折り鶴が届きます。その折り鶴は、再生紙としてリサイクルされているそうです。世界各地から届く千羽鶴、想いを無駄にしないとても良い取り組みだと思いました。

2 日目には、宮島、厳島神社に行きました。大鳥居は工事が行われていて見る事ができませんでしたが、世界遺産に触れる機会があり、とても良かったです。また宮島の方々が声をかけてくださり、人の優しさ、温かさを感じることもできました。

なぜ、そんな広島に原爆が落とされなければならなかったのか。

「戦争を終結させるための手段」と平和記念資料館に書かれていました。僕はこの言葉に疑問を感じました。なぜ、罪のない十何万人もの人々の命を奪わなければならないのか。平和的解決で戦争の終結をすることができなかったのか…。

今年は新型コロナウイルス感染症の影響で参加できなかった平和記念式典でのことも代表の平和への誓いでこのようなことを言っていました。

「私たちの未来に、核兵器は必要ありません。

私たちは、互いに認め合う優しい心を持ち続けます。

私たちは、相手の思いに寄り添い、笑顔で暮らせる平和な未来を築きます。」

互いに認め合う優しい心を持つこと、相手の思いに寄り添うこと、この2つは、平和に近づく第一歩として僕も実践しなければならないことだと思いました。

原爆投下から75年を迎え、被爆された方々の高齢化が進む中、僕たちは被爆された方々からお話を聞くことができた体験に感謝し、無駄にしてはいけない、自分達が伝えていかなければならないと思いました。

この悲惨な出来事は、絶対に忘れてはならないし、絶対に繰り返さないように、原爆の恐ろしさを伝えていきたいです。

毎日楽しく、友達と笑って過ごせていること、広島派遣に参加して学びに行けたこと全てに感謝したいです。

この広島派遣で学んだこと、体験したことを無駄にしない行動をしていきたいと思います。

湖北台中学校 2年 大津 佳奈

私は、この広島派遣で、色々な展示物を見たり被爆した方の話を聞いたりして、色々なことを学び、感じました。

私は原爆について、もう二度とやってはいけない、恐ろしいものだということは思っていました。私が広島で見たものは、想像していたものよりはるかに恐ろしく、悲惨なものでした。

1日目、私たちが広島に着き、最初に行ったのは、平和記念公園でした。私は、ここで初めて原爆ドームを生で見ました。その原爆ドームはボロボロでガラスの貼ってある窓なんて一つもなく、周りには瓦礫のようなものがたくさん落ちていました。

そのあと、ガイドさんに案内してもらいながら、公園内を見学しました。公園内には平和を願う平和の鐘、平和の灯や原爆の威力を実感させる平和乃観音像、被爆した方々の遺骨などもありました。そして、公園の地面の中には、細かい骨などが今も埋まっていると聞きました。他にも、公園内には噴水がたくさんありました。それは、熱線で火傷をした人達が、「水が欲しい。」「水をください。」などと言い、苦しみながら死んでしまったので、その人達のために作られたそうです。説明の時、ガイドさんが「みんな笑いながらピースをして写真を撮って帰っていくけど、ここはそんな場所じゃない。もっと平和について考える場所だ。」と言った言葉が特に印象に残りました。

そのあと、私たちは被爆者の國分さんの話を聞きました。國分さんは、お寺の生まれで、戦争の最中に育ったため、中学では厳しい訓練を受け、機械作業もしていたそうです。

1945年8月6日7時過ぎ、警報が鳴り響きました。8時過ぎ、國分さんは寺を出たところでした。8時15分、「ピカッ」と閃光。國分さんは爆風の影響で何かに頭を打たれてしまいました。晴れていて明るかった広島はほこりやチリなどが舞い、夜の様に暗くなりました。そして、光がすうっと戻ってきて周りが見えるようになってきました。でも、あたりを見ると、それは明るくにぎやかな広島ではなく、地獄と化した広島でした。國分さんは急いで帰り、家族を助け出そうとしましたが、お母さんと弟が倒れてきた家具につぶされ、声をかけても反応がありませんでした。國分さんは助かった家族と一緒に逃げました。その後、家の方向を見てみると、煙が立っていました。國分さんは、「母は死んでから焼かれたのがせめてもの救い。」「原爆で、何もかも失った。」と言っていました。それを聞き、私は原爆1つでこんなにも人が苦しめられるのかと、とても心苦しく思いました。



2 日目、私たちは千羽鶴を奉納しに原爆の子の像の場所まで行きました。そこには、平和を願った千羽鶴がたくさん奉納されていて、1 年間で約 1 千万羽、重さにして約 1 トンも送られているそうです。世界中から送られていると知り、とても驚きました。

次に、平和記念資料館の見学をしました。資料館には、原爆によって亡くなられた方々の形見となっているもの、熱線や爆風の影響で形が変わってしまったもの、原爆が落とされた日のことを描いたものやそのあとの苦しみを描いたものなどがたくさん展示されており、原爆 1 つで変わってしまった広島の様子、被爆した方々の気持ちなどが強く伝わってきました。

他にも、爆心地から 1 番近い小学校や、地下にいたため助かった方がいた場所にも行きました。どちらも床も天井も壁も凸凹していたり、剥き出しになっているものがあつたりと、地下なのに爆風の影響を受けていて、原爆の威力を肌で感じることができました。

原爆が落とされた時、そして落とされた後もひどく苦しめられました。たった 1 つの原爆で本当にたくさんの人々の心と身体は深く傷つき、今も尚苦しんでいる人がいます。でも、そんな恐ろしい原爆が今も色々な国にあり、この時落とされた原爆よりも強い威力だと聞きます。

みんな「今は平和だ。」というけれど、それは表面だけで、裏ではまだ戦争は続いているし、原爆だって次にいつどこに落されるか分からない。平和ではない日々が続いているのではないかと感じました。

広島、長崎に落ちた原爆は、たくさんの人々を無差別に苦しめ、殺し、昔も今も辛い思いをさせている、とても恐ろしく、悲惨なものです。原爆の投下は、絶対に二度と繰り返してはいけません。

今回学んだこと、思ったことを伝えていくことが私たちの使命だと思うので、これからは少しでも多くの人に伝えられるように努力していきたいと思います。

白山中学校 2年 寺島 一樹

「広島で感じたこと」

僕は、広島派遣に行かせていただいて、その 3 日間で、今まで自分が持っていた戦争や平和に対する考え方が大きく変わりました。平和とは何かを考えるきっかけになりました。

1 日目、広島に到着すると、初めに平和記念公園を訪れました。ガイドの方に案内をしていただいて公園内を周ると、とてもきれいな公園の中に、爆風によって墓石が飛び散ったお墓やまだ引き取られていない遺骨の名簿など、原爆の被害を生々しく伝えるものがたくさんあって驚きました。ガイドの方の話の中で印象に残ったのは、「ここは楽しく写真を撮るための場所ではない。」という言葉です。今はとても美しい公園も、地下 1 m のところには原爆によって焼けた町の残骸が埋まっていることを、忘れてはならないと思いました。



次に訪れたのは、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館です。そこでは、被爆体験講話を聴きました。話をしてくださった國分良徳さんは、現在 92 歳で、16 歳の時に被爆されたそうです。國分さんは、自分の町が焼けていく様子や家族が苦しみながら亡くなっていった様子など、辛く悲しい記憶を僕たちに伝えてくれました。僕だったらきっと、思い出したくもないようなことを、時折言葉に詰まりながらも一生懸命に語ってくださる姿を見て、この記憶は絶対に伝えて行かなければならないと感じました。また、当時の広島には、國分さんのようにとてもつらい体験をされた方がたくさんいたと思うと、普段当たり前のように聞いていた「戦争を繰り返さない」という言葉、この言葉に、どれだけ多くの人々の願いが込められていたのかに気付かされました。

2 日目に訪れた平和記念資料館。3 日間の活動の中で、最も強く印象に残りました。

平和記念資料館で感じたことは 2 つあります。1 つは、自分たちにとっても戦争や原爆は遠い話ではないということです。資料館に展示されている物の中には、お皿や時計などの日常にありふれたものや、まだとても小さな子どもの服もありました。原爆によって殺されるなんて、きっと夢にも思っていなかった人たちの命が突然奪われてしまったことが、資料から伝わってきました。今は 1945 年当時に比べて、配備されている核爆弾の数がとても増えています。もしもそれが日本に再び使われるようなことがあったら、無関係な人なんて 1 人もいません。1 人 1 人が戦争というものを身近に感じ、絶対に許さないという強い意志を持つことが必要だと思いました。

2 つ目に感じたことは、被爆された方やそのご遺族の方の気持ちです。資料館に展示されている資料は、焼けてしまった家に唯一残っていたものや、亡くなった家族からの最後の手紙など、どれもそれぞれの人たちにとって、とても大切な思い出だと思います。僕は初め、

誰も引き取る人がいない物を資料館に置いているのかと思いました。しかし、資料の横に記されていた説明やエピソード等を見て、全て大事なものだけれど、たくさんの人に知ってもらうために資料館に寄贈してくれているということが分かりました。大切な思い出を預けてまで、たくさんの人にその悲しみを知ってほしいという思いに、尊敬の念が湧きました。

本川小学校平和資料館へは、平和記念資料館から10分ほど歩いて向かいました。実際に被爆した校舎を利用した建物だったので、中に入っただけで衝撃を受けました。所々に当時のままの壁があったり、めちゃくちゃになった教室の写真が飾られていたりしたので、頑丈な学校に対しても原爆がどれほどのダメージを与えたのか分かりました。学校にいたほとんどの生徒が亡くなってしまったと知り、原爆は物や家だけでなく、たくさん子ども達の未来までも奪ってってしまったのだと思い、原爆による被害は数字ではとても測れないものだと思います。

僕は、3日間の派遣の中で、ボランティアで活動されている方がたくさんいたり、一般の市民の方が原爆に関する施設について説明してくださったりする姿などに触れ、広島でしかできない体験をたくさんすることができました。僕が触れ、感じたこと、そして広島の人たちの思いを学校の人たちにも伝えていきたいです。

1945年8月6日午前8時15分。広島で起こった悲劇を決して風化させることなく、今なお苦しんでいる人がいるということを忘れずに、今よりもっと平和な世界を作りたいです。

白山中学校 2年 信田 明音

「原子爆弾」

今から75年前の8月6日8時15分。広島町は原爆により、一面火の海となりました。私は、戦争や原爆といった出来事に対し、最初は「多くの人々が苦しみ、悲しんだ、悲惨な出来事。」としか考えていませんでした。しかし、今考えると浅い考えだったと感じています。そう考えられるようになったのは、広島派遣中の3つの経験があったからです。



1つ目は、実際に広島で実際に広島で建物を見たことです。平和記念公園や宮島・厳島神社を訪れたとき、75年前に本当に戦争が起きていて、原爆が投下されたのかと思わず疑ってしまいました。それは、美しい景色が広島町に広がっていたからです。しかし、原爆ドームを見たとき、原爆投下という出来事が本当に起こったことであることを突き付けられました。建物の所々が崩れ、周りに瓦礫が落ちている光景から、原爆のもたらした影響の強さを感じました。原爆ドームは昔、保存するか、取り壊すかで市民の意見が分かれていたそうです。しかし、高校生の日記をきっかけに、原爆ドームを保存するための署名活動が行われたので、現在もその姿が残されています。

また、同じように本川小学校平和資料館には、原爆投下後の建物の状態がそのまま残されている場所がありました。

このように、当時の状態を現在、私たちが見ることが出来ているのは、実際に体験していない人に戦争や原爆の悲惨さを伝えようとする、当時の人々の努力があったからだと感じました。

2つ目は、「修学旅行は1度も行ったことがない。」という言葉聞いたことです。この言葉は、1日目に被爆体験講話を下された、原爆被爆者である國分良徳さんのお話の中の一言です。

私は最初、この言葉を聞いたとき衝撃を受けました。確かによく考えてみれば、戦争時に旅行に行くことはとても難しいことだと思います。しかし今の時代では、「行きたい。こんなことをしたい。」と思えば出来ることが、戦争時には当たり前が出来なかった。このことから、私たちの当たり前が当たり前ではないということを感じました。また、自分のしたいことが出来たり、何気ない日常を過ごしたり出来ることは、とても幸せなことであることも改めて実感しました。

そして、國分さんは最後に私たちに向けて、このように言っていました。

「戦争のない、平和な世の中へ」

この言葉を聞き、まず私たちが、戦争について知る必要があると思いました。そして、二度とこのような出来事が起きないように、自分だけではなく、色々な人と意見を交換していくことが大切だと考えることが出来ました。このことが、平和な世の中をつくることにつながると、國分さんの言葉から気づくことが出来ました。

3つ目は、2日目に訪れた平和記念資料館にあった、実際に被爆された方の着ていた服を見たことです。服は所々に穴が開いていて、ある部分は継ぎ当てされていました。このことから私は、ボロボロになっても服をととても大切にしていたのだなと感じました。そして、それほど物資が普及していなかったり、お金がなかったりといった苦勞もあったのだとも考えられました。そう考えると、今はとてもありがたい生活をしているのだと思いました。

そして、たくさんの資料を見たことで、戦争時にも大切なものが今と同じようにあったことに気づくことが出来ました。もちろん、今と戦争時の日常が、全く同じだったり違っていたりしていたとは言えません。しかし、置かれている状況や環境が違っていても、大切な人を失った時の悲しみは、時代によって変わることはないことを改めて考えることが出来ました。

私は広島派遣を通して、戦争や原爆といった出来事に対し、「多くの人の命、大切なもの、そして当たり前な日常を奪った悲惨な出来事。」と考えることが出来るようになりました。

現在私たちは、新型コロナウイルス感染症の流行により、当たり前な日常、そして自由を奪われています。このことは、今までの生活の中から想像出来たことではなかったと思います。そして、「当たり前が奪われた」と考えると、戦争や原爆といった出来事も現在と少し共通する部分があると思いました。

今の私たちだからこそ、戦争や原爆について考えられることはたくさんあると思います。

今回、広島派遣で実際に自分の目で見たり、耳で聞いたりしたことを多くの人に伝えていきたいです。そして、1人でも多くの人に、戦争や原爆の恐ろしさや悲惨さを知ってもらい、あのような当たり前な日常を壊す出来事が二度と繰り返されないようにしていきたいです。